

古代史に遡ろう

第 60 回 ー縄文時代ー その 3

縄文人は日本列島にいつ頃現れたのか？日本列島には縄文人が住む以前に旧石器人が住んでいた。旧石器人は現生人類と同じホモ・サピエンス（新人）である。旧石器人は、10万年ほど前に故郷アフリカを出発してヨーロッパやアジアに拡がったが、そのなかにマンモスなどを追ってアジア北部のシベリアに展開したグループがいた。ところが2万年前の氷期の最盛期の頃、そのマンモスたちが、シベリアから日本列島周辺の大陸棚に生まれた草原をめがけて陸化した海峡を通して日本列島に来ると、彼等も鋭い石器を付けた槍を持って日本列島にやってきたのである。1万2千年前頃から地球が暖かくなって海面が上昇しだすと、大陸棚と陸橋は水没した。そのため帰路を失った大型哺乳動物は絶滅し、それにつきしたがっていた人間たちも絶滅した、とおもわれる。

一方、氷期のころ、シベリアのバイカル湖以北で氷に閉じ込められ動けなかった人たちが旧石器人のかわりに日本列島にやってくるようになった。そのあたりは極北にもかかわらず、当時の偏西風が中央アジアの乾燥地帯からパミール高原、天山山脈、アルタイ山脈にそって北上してきたため亜寒帯気候になっていた。その結果、タイガとよばれるカラマツなどの樹林帯が形成されていたのである。かれらとその後輩たちは、1万6千年前から1万年前の後氷期の地球気温の上昇のたびごとに氷原の裂け目をとおって南下し、シベリアのバイカル湖周辺で土器を作るようになり、新石器人となってアムール河を下ってオホーツク海や日本海にきた、とおもわれる。その一派が日本にもやってきたのであろう。

さて、2019年5月14日の新聞報道によれば、国立科学博物館などの研究チームが北海道礼文島の船泊遺跡から出土した縄文人の全ゲノム（遺伝情報）について、世界ではじめて高精度な解析に成功したと発表した。約3800年前の女性の臼歯からDNAを抽出し解析した遺伝子の特徴から、この女性は脂っこい食べ物を食べてもおなかを壊したり、体調を崩したりしないような高脂肪食の代謝に有利な特徴があることがわかった。こうした特徴はイヌイットら北極圏に住む人たちに見られるが、狩猟生活をしなくなった現在の日本人にはほとんど見られなくなっているという。当時、中国大陸では既に農耕が始まっていたが、縄文人は食料の獲得の主要部分を農耕ではなく、なお狩猟に頼っていたらしい。また、遺伝子の多様性があまりないことから、縄文人は小人数の集団での生活を約5万年間にわたって続けていたと推測された。現在の韓国人や台湾の先住民、フィリピン人に近いという。

しかし、日本列島の縄文人はバイカル湖からやってきた彼らがすべてではなかった。その後も地球気候の変動にともなって、列島の北から南から、たくさんの人々がやってきた。たとえば古事記や日本書紀（以下、記紀と省略）、さらに肥前国や常陸国の風土記などにツチグモ、クズ、クマソ、コシなどと書かれた人たちだ。戦前、歴史学者の喜田貞吉が示唆しているように、ツチグモ



やクズは8千年から6千年前頃の気候が温暖に向うところにやってきた南方系の漁民たちか、とおもわれる。コシも北方起源説もあるが、エミシと対決したことから南方からきたものだろう。

続いて「記録」に多く登場する北方から来たエミシがある。ヒラ族あるいはヒナ族ともいわれ東北に拠点をおいたが、信濃も「ヒナ野」の転訛した地名とされる。またアイヌもその一族とみられ、五千年前の地球気候が寒冷に向うころやって来た北方系の狩猟民だったのであろう。

また出雲族がある。朝鮮半島からきたとみられるが、その詳細は不明だ。だがその一派にはキ族があり、紀伊のほか隠岐（おき）、壱岐（いき）、伯耆（ほうき）、安芸、讃岐、磯城（しき）、佐紀、葛城などの地名を各地に残している。

他にアマ族がある。民族学者の宮本常一によれば、アマ族にはこの国に古くからいた住吉族のほかに、揚子江の南から東シナ海の沿岸や朝鮮半島に沿ってやってきた宗像族（むなかた）、大山積神を奉じる人々。さらに南九州の隼人族（はやと）などがいるという。うち宗像族は土地に定着して海人郷（あま）をつくつたが、隼人族などは定住しなかった。一口に縄文人といってもその出自はいろいろであろう。

【第三種郵便物認可】 2019年5月14日(火) 日本経済新聞

全ゲノム解析で縄文人の起源に迫る

3.8万～1.8万年前
縄文人の祖先が大陸の人類集団からわかる

南北諸島や朝鮮半島などを通じて日本列島へ移動

縄文時代
1.6万～3000年前

礼文島 船泊遺跡
(今回、DNAを解析)



北海道・礼文島の船泊遺跡から発掘された縄文時代後期(約3800～3500年前)の女性人骨—国立科学博物館提供

縄文人の起源 3万8000年前か

国立科学博物館

全ゲノム解析

国立科学博物館の神沢秀明研究員らは13日、縄文人の全ゲノム(遺伝情報)を解析し、縄文人が約3万8千年前～1万8千年前に大陸の集団からわかれたとみられることが分かったと発表した。日本人の祖先がどこから来たのかといった謎にゲノムから初めて追った貴重なデータとなる。詳細を5月末にも学術誌で発表する。

国立遺伝学研究所や東京大学など共同で、礼文島(北海道)の船泊遺跡で発掘された約3800年前～3500年前の縄文時代後期の女性人骨からDNAを取り出して解析した。最先端の解析装置を使い、現代人のゲノム解析と同じ精度でDNA上の配列を特定した。

特定した配列を東アジアで現在暮らす人々の配列と比べた結果、縄文人の祖先となる集団が東アジアの大陸に残った集団からわかれた時期が約3万8千年前から1万8千年前であることが判明したという。

縄文人は日本列島に約1万6000年前から3000年前まで暮らしていたと考えられている。3000年前以降は大陸から新たに弥生人が渡来し、日本列島に住む人々の多くで縄文人と弥生人の多くのゲノムが交わったことがこれまで知られていた。

今回の解析によると、国内の地域ごとに縄文人も検討していく。

から現代人に受け継がれたゲノムの割合が大きいたゲノム情報から船泊遺跡で発掘された女性骨アルコールに強い体質であったことが、脂肪を代謝しにくくなる遺伝子の発現も分かった。現代人の様々な疾患について縄文人のゲノムから説明できる可能性もあるという。

古代の人類のゲノムを解析する試みは欧米を中心にナンタル人などで進んできた。縄文人の全ゲノムが読まれたことで、アフリカで生まれた人類集団がどのようにならにアフリカの解析を進める。配列を公開して海外の研究機関との共同研究も検討していく。

◇日本経済新聞 2019.5.14

- 文献 1) 縄文人に学ぶ 上田 篤 新潮新書 (2013)
2) 朝日新聞 2019年5月14日(火)朝刊